

素話と子ども

— 子どもの言葉と想像力を育むもの —

上 出 恵 子

Storytelling and children — nurturing children's vocabulary and imagination —

Keiko KAMIDE

Abstract

This paper discusses Storytelling, “Storytelling” meaning listening to stories told orally, without using visual aids such as picture books, picture-card shows and so on. Although Storytelling started with “Koen-douwa” (oral public storytelling) in the Meiji era in Japan, it has tended to decline as modern children are surrounded by various media, and it has become normal to receive stories through various audio-visual educational materials. However, Storytelling centering on the spoken language is important to nurture children's fertile imagination and vocabulary, as it supports semiotic knowledge, emphasizing the meaningful language, and making the multi-faceted nature of language clear.

1. はじめに

子どもたちの育ちの環境の変化は著しい。このような劇的な変化をもたらした要因の一つに次々と出現、展開する多様なメディアの存在があるのは間違いない。A I (Artificial Intelligence: 人工知能) や I o T (Internet of Things: モノのインターネット) が話題とされる今、保育・教育においても I C T (Information and Communication Technology) は喫緊のこととされ、タブレットの導入も当たり前のようななされようとしている(注1)。かつてテレビ(ビデオ)の長時間視聴と子どもの発達を深刻なものとして受け止め、日本小児科学会および日本小児科医会が相次いで提言を出したのは記憶に新しい(注2)。このこと一つを見てもメディアの問題は子どもの育ちの環境を構成するものとして看過できないし、またメディア・リテラシーも重要なものとしてある。

本稿は、このような多メディア時代、社会において、子どもたちの発達に関わる保育者はどのような援助・支援が可能かについて、素話に着目し、現代における素話の意義について考察を試みるものである。

2. 日本における素話・口演童話とストーリーテリング

素話とは、「絵本や道具を用いずに声だけで物語を聞かせること」(大滝まり子)(注3)であり、「物語を覚えて子どもたちに語ることをいう。視聴覚教材などを一切用いず、人の声のみで語る」(石井光恵)(注4)のものである。〈声の文化〉(注5)に生きる子どもたちにとって、「声だけ」「声のみ」の素話こそが本来のお話であり、物語体験の原点はここにあるといえよう。しかしながら、今は、絵本や紙芝居、ペープサート、エプロンシアターなどの視聴覚に訴える様々な児童文化財が身近な

ものとしてあり、子どもたちの保育の場でも素話はかえって珍しいものとなっている。これもまた多メディア時代、社会の産物、現状というべきことだろうが、より正確にいうなら、「昔話が近代の所産であることを忘れてはならない」（注6）との高木史人の指摘のように昔話も書く営みを身につけた語り手、聴き手によって今は存在するように、いわゆる保育の場における素話もまた、書くことや書物というメディアと無縁のものではないのである。この間の事情を「新しい語り」として次のように述べるのは「語り手の会」代表の櫻井美紀である。

「新しい語り」の語りは「伝承の語り」に対して使用されるもので、「伝承の語り」が耳から聞いたものを、直接、口で語り出すものであるに対して、「新しい語り」は、いったん書物に入った昔話や物語を読み、その後あらためて口語りにするものを指す。伝承の語りを「村の語り」というなら、それに対して新しい語りは「都市の語り」という。社会の近代化にともない、地域の生活も個人生活も合理化され、その結果の言語の環境は、様々な語りの変化を生み出した。ここで端的にいうなら、新しい語り＝都市の語りには「文字の介在」がある、ということである。（注7）

続けて櫻井は、このような「新しい語り＝都市の語り」は、「実は百年前の口演童話から始まっているのである」と述べている。

口演童話とは、日本における児童文学の嚆矢『こがね丸』（1891／明治24年）の作者・巖谷小波によって明治半ばから始まったものであった。1896（明治29）年、京都に小波が旅行した時にある小学校長から「是非私の学校に来てお伽噺をして下さい／貴下のお伽噺は皆生徒が面白がって読んでいるのですから、それを実地に口演して下さいなら、なお興味を感じることでしょう」という依頼を受けて全校生徒にお伽噺を語り、それが大好評で、以後、小学校を訪問するたびに求められ、小波は「語って聞かせる“お噺”だから、口演童話と名付けることにした」と記している（注8）。主に小学校の行事として発展したが、ラジオもテレビもなく娯楽が限られた時代のこと、たちまち一般の娯楽として迎えられるようになり、幼稚園、小中学校、女学校の講堂ばかりではなく、集会場や公会堂、帝国劇場などの劇場で口演を行った。小波は、「少年世界」をはじめとする幼少年向けの雑誌の発行もしていた博文館の主筆であったが、その博文館に久留島武彦が入社。二人は雑誌宣伝のために全国を巡回し、口演を行った。小波、久留島、そして、東洋幼稚園を開設し、保育に口演を取り入れた岸辺福雄（注9）は、「三大童話家」と呼ばれ、「童話」といえば読む童話より「話す童話」を指す方が一般的であった」（注10）とされるように口演童話は隆盛を誇ったが、時代の趨勢に弱く、戦時体制に呑み込まれ、戦意昂揚のために利用された。戦後、このような口演童話に代わって素話の世界を担ったのが、ストーリーテリングであった。

ストーリーテリングは、1952（昭和27）年にアメリカで図書館学を専攻した渡辺茂男が帰国、その後、順次、間崎（大月）ルリ子、松岡享子などの図書館員が帰国して、アメリカの図書館のストーリーテリングを広めた。74年、東京子ども図書館が、石井桃子のかつら文庫、土屋滋子の2つの土屋児童文庫、松岡享子の松の実文庫を母体に、松岡享子が理事長として発足。月例お話の会、お話の講習会などの開催、機関誌「こどものとしょかん」の発行、小冊子「おはなしのろうそく」「たのしいお話」シリーズの刊行により、ストーリーテリングは全国に普及していった。

以上のように、口演童話、そしてストーリーテリングと「声だけ」「声のみ」の素話は、子どもたちに受け入れられ、保育の場でも実践されてきたが、現在では絵本の読み聞かせや紙芝居の実演など、視聴覚に訴える様々な児童文化財の活用により素話は遠いものになってしまったとは先述の通りである。しかし、多様なメディアが子どもたちにも身近なものとなり、浸透してきた今の時代、ますます子どもたちに必要なこと、重要なものとして、「声だけ」「声のみ」の素話はあるのではないだろうか。

3. 素話が育む「ことばの力と想像力」

なぜお話（素話）なのか、松岡享子は「お話が子どもの中に育てる力」を次のように列挙している（注11）。

- 一、想像力を育てる
- 一、考える力（ものごとの核心に注意を集中し、それを持続して、ひとつのことを追求する力）を育てる
- 一、聞き手と語り手、あるいは聞き手同士の間関係性を育てる（そぼくな、人と人とのコミュニケーションのよさを体得させる）
- 一、ことばの力（語彙、語感）を育てる
- 一、お話をたのしむ力を育てる
- 一、字の読めない子にも文学をたのしむことを可能にする

「お話が子どもに働きかけて、子どもの中に育てる力は、どれひとつをとっていても、読書能力につながるものはありません」と松岡は述べて、お話は「耳からの読書」であり、「目からの読書による読書生活」の「素地」をつくるものだと指摘。また、「読書ができるためには、単に字が読めるというだけでなく、もっとほかの能力が要求されると思います。中でも、とりわけ重要なのは、ことばの力と想像力だと思います」と述べ、この「ことばの力と想像力」を育てるものこそお話なのだと松岡は明言している。このようなことは一般的に言われ、また考えられることでもあるが、今少しそのメカニズムに迫ってみるなら、それは次のようなことではないか。

問題は先ずそれが「耳からの読書」と言われるように音声言語によるものだという点である。視覚的なものを介さずに聴覚のみで言語を受容する場合、記号学的に言うなら、本来は恣意的なものでありながら表裏をなすかのような記号表現（音・形式）と記号内容（概念・表象）の記号内容が際立ち、それに導かれるように新しい地平が拓かれていくことがある。たとえば、谷川俊太郎「かっぱ」である。

かっぱかっぱらった
かっぱらっぱかっぱらった
とってちった

かっぱなっぱかった
かっぱなっぱいっぱかった
かってきってくった

（『ことばあそびうた』より）（注12）

「かっぱ」に類する「らっぱ」「なっぱ」「かっぱらった」「なっぱかった」などの音のつながりだけで、カッパが菜っ葉を食べている非日常的なナンセンスな光景が現出する。ここには特段の意味はない。日常では見ることも経験することもできない世界を楽しめば良いだけである。このような一連の詩を谷川は『ことばあそびうた』としたが、そのように言葉と遊び、また戯れる、いわば自由をこうして私たちは得ることができるのである。いささか大袈裟な物言いになったが、このような自由は、ある意味では不安と恐怖をもたらすものでもある。表裏をなしていると思っていた記号表現と記号内容が遊離し、彷徨い出すのは、確かな世界に亀裂が入ることでもあるからだが、子どもたちがそのような不安や恐怖に陥らないで済むのは、お話では音声言語と言ってもそれは肉声の、しかも対面によるものだからであろう。読み聞かせのようにそこに本があるわけではなく、終始子

どもたちの目をしっかり見ながらお話は語られるのである。またそのお話も「化合」と松岡が述べているように、お話を覚えるために繰り返し読むことによって「物語の諸要素と語り手の個性とは、ひとつにとけあって、物語は、単に活字に還元してしまえる物語ではなく、語り手によって命を吹き込まれた物語に変わる」、そのような相即不離の生身のリアルだからである。こうして子どもたちは揺るぎない確かな現実世界の中で安堵しつつ、のびのびと非現実を楽しみ、様々な可能性にその想像の翼を羽ばたかせることができるのであった。

ついで「ことばの力と想像力」ということで問題となるのは、「耳からの読書」といわれるようにそれは書かれたお話、つまり文学ということである。素話ではそれはむしろ物語というべきなのかもしれないが、今あえて文学としたのはその言語はいかに自然体に見えたとしてもそれらは比喩、レトリックであり、その集積が文学だからである。でなければ、興味をそそられたり、心に残るといこともなく、日常に埋もれ、流され、忘れ去られてしまうだろう。このような文学に触れることで子どもたちの言葉は、単に語彙が増えるだけでなく、飛躍的に彩り豊かなものとなり、表現する力も自ずと身についていくのだが、このような比喩、レトリックと子どもの言葉およびその発達については別稿にゆずるとして、ここではそれが中村雄二郎が〈レトリックの知〉としてその重要性に着目した「概念的・分析理性的な知ではなくて、言語的・共通感覚的な知」(注13)に関わるものであることのみ指摘しておきたい。

4. おわりに

子どもの育ち、とりわけ「ことばの力と想像力」を育むものとして、以上のように素話があることを述べてきたが、残念なことに保育現場での素話の存在感は希薄になってしまった。多種多様な視聴覚の教材、また保育現場の多忙さが、松岡がいう「お話によって、また語り手によって差はありますが、お話をするためには、短くても一週間、ながければ数ヶ月にわたって練習をしなければなりません」という「化合」のための時間を奪い、素話の機会をなくしてしまったのかもしれない。こうして素話体験のない世代が増えつつあるわけで、このままだと素話そのものが保育の場から消え去ってしまうのではないかとこの虞を抱かざるを得ない。

子どもたちの発達に関わる保育者こそ、多メディア時代、社会において「ことばの力と想像力」を育むものとしての素話の再評価をまず為すべきであろう。その上で、実践が困難であるならば、地域と連携、つまり素話のトレーニングを受けたボランティア、また「お話は、児童図書館員の仕事のひとつとして認められ、広がっています」と松岡が述べているようにお話＝素話を職業的使命とした図書館員などの力を借りつつ、保育の場に素話を甦らせることも可能ではないか。目まぐるしく子どもたちの育ちの環境も変化・変容する今の時代だからこそ、素話の意義、その効果・効用について自覚的でありたいものである。

(注1) AIについての話題が急速に増加する中で、保育園を経営する小林照男(「コピーアンドアソシエイツ」社長)は「人生の土台作りである幼少期にこそ、AIを使いこなす基礎をはぐくまなくては。うちには、4歳児から、ひとりに1台、iPadが使える保育園もあります」(「AIは味方ですか」「朝日新聞」2017年1月16日(月))と時代の趨勢として事態を捉え、幼少期から向き合わないといけないものとしている。

(注2) 日本小児科医会は「子どもとメディア」の問題に関する提言(2004年2月)、日本小児科学会は「乳幼児のテレビ・ビデオ長時間視聴は危険です」(2004年4月)との緊急提言を行っている。いずれも言語の発達に影響を与えるものとして長時間視聴に警鐘を鳴らしている。このような背景には、1997年12月16日に発生したポケモン事件(ショック)があるとされるが、メディアの問題を身体レベルで受け止めたものとして、今はスマホに焦点化され、日本

- 小児連絡協議会「子どもとICT～子どもたちの健やかな成長を願って～」委員会から「子どもとICT（スマートフォン・タブレット端末など）の問題についての提言」が出されている。
- (注3) 谷田貝公昭／編集代表『新版・保育用語辞典』一藝社、2016年
- (注4) 森上史朗・柏女霊峰／編『保育用語辞典・第8版』ミネルヴァ書房、2015年
- (注5) W・J・オング／著、桜井直文・林正寛・糟谷啓介／訳『声の文化と文字の文化』藤原書店、1991年
- (注6) 高木史人「昔話の〈場〉と〈時〉」(『岩波講座・日本文学史』第17巻) 岩波書店、1997年
〈お話〉という概念で、口承文芸という枠組みからも文学という枠組みからもこぼれ落ちて行く経験を対象化しようとした重信幸彦は、その著『〈お話〉と家庭の近代』(九山社、2003年)において、「〈お話〉の場として囲炉裏端のイメージをフレームアップして、一種のノスタルジアの対象にして」いったのは柳田国男だと述べ、〈お話〉そのものも歴史的産物であると指摘している。
- (注7) (注10) 櫻井美紀「口演童話から語り手運動まで」(『岩波講座・日本文学史』第17巻) 岩波書店、1997年
- (注8) 内山憲尚『日本口演童話史』(文化書房博文社、1972年) および櫻井美紀「口演童話から語り手運動まで」(前出)に拠る。
- (注9) 巖谷小波以前に岸辺福雄が口演童話を行っていたとの説もあるが、本稿では小波から始まったという一般的な説に従った。
- (注11) 松岡享子『お話とは(レクチャーブックス・お話入門1)』東京子ども図書館、1974年
以下、引用箇所松岡のものはこの著書からである。
少人数を相手に書物＝文字で書かれた昔話や童話などを自分の言葉で自然に語るストーリーテリングと、大人数を対象として技巧的だった口演童話との違いがしばしばいわれてきたが、勝尾金弥が「最近むしろ共通点を見直して活動に生かそうという声もおきてきている」(「ストーリーテリング」『日本児童文学大事典』第2巻、大日本図書、1993年)と述べているが、本稿も相違点ではなく、双方に通底する子どもたちの言語環境に関する在り様を問題としている。櫻井に倣えば「新しい語り＝都市の語り」ということだが、このことをより鮮明にするためにストーリーテリングを「耳からの読書」と指摘、活字メディアとの関係を明確にした松岡享子のストーリーテリングに関する言及を参考とした。異なるということでは、口演童話とストーリーテリングの相違点のみならず、口演童話の〈三大童話家〉のそれぞれの語り方が全く違ったということも重要であろう。ことは〈語り〉の問題なのであるが、詳細は別の機会としたい。
- (注12) 谷川俊太郎・詩、瀬川康男・絵『ことばあそびうた』福音館書店、1973年
- (注13) 中村雄二郎『術語集－気になることば－』岩波書店、1984年

※本稿は、第7回幼児教育実践学会における口頭発表「言葉を育てる。イメージを育む。～おはなしやわらべうたを保育に取り入れて～」(共同発表者：認定こども園いなさ幼稚園園長・田中元子、2016年8月19日(金)、東京家政大学)をもとにまとめた論考である。認定こども園いなさ幼稚園の初代園長・松尾利信氏は久留島武彦の弟子で口演童話家としても名高く、保育に積極的に口演童話を取り入れ、また、その孫の現園長・田中元子氏はストーリーテリングを保育の場で日常的に実践されている。認定こども園いなさ幼稚園のこのような日本の素話の歩みそのものの保育実践に刺激されて本稿がなったことをここに記し、田中園長に改めて感謝申し上げたい。